

## <随想>パリの映画館雑感

著者	佐川 誠義
雑誌名	日本文学誌要
巻	38
ページ	114-115
発行年	1987-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019541">http://hdl.handle.net/10114/00019541</a>

## パリの映画館雑感

佐川 誠義

今年の夏も、国際会議を名目にして、約一カ月をパリで過ごした。パリにはずいぶん多くの感慨があるが、そのなかでも、パリで見る映画には、その映画自身がつ内容とは別の独特の味わいがある。という、それはフランス映画が好きだからでしようなどと、よく言われるのだが、それは違う。第一、私はフランス映画があまり好きではない。それでは、パリで見る映画がなぜこんなに私をひきつけるのか。

パリでは、他の観客と映画に対する感動をわかちあえるという気がするのだ。他の観客と感動を共にする、この考えれば当たり前の習慣を私達とはつくに失ってしまったている。それを極端な拡大ロードショーのせいにするのはやさしい。またビデオの影響も見逃せないだろう。しかし果たしてそれだけだろうか。私には疑問でならない。

たとえば、岩波ホールとか六本木シネヴィヴァンのように、かなり念入りに見捨てられた映画を意欲的に上映しているようなところでさえ、そこにたちこめている雰囲気はなにか無機的で熱っぽさに欠けている。あちこちでもう既に言い古された表現をつかって恐縮だが、「文化人」的したり顔が鼻についてならない。テオ・アングロプロスの「シテール島への船出」を東京で見終わり、涙を見せる

のが恥ずかしくて立ち上がれなくなっていた時、まわりでなされていたおよそ感動とは無縁の作品評には苛立ってならなかった。勿論、自分の感動をひとに押し付けてはならないだろう。しかし、私だけがうちのめされていて（少なくとも私が見渡したところでは）、あとの人はそそくさと白けた表情で聞いたようなことをわけしり顔で言い合うというようなことは、異常なことのように思われるし、我慢のならないことだった。フランチェスコ・ロージの「エポリ」ときもまったく同様で、最後のクレジット・タイトルがおわり、館内が明るくなったので、やむなく立ち上がったら、誰ひとりとして残っていないのに驚かされたものである。

パリにも拡大ロードショーはある。でもそれさえ日本の東京のそれとは違う。三年前に見たスピールバーグの「インディ・ジョーンズ」が、いかにパリの人達を無邪気に沸き立たせていたことか。ジョー・ダンテの「グレムリン」が、大の男たちをどんなによろこばせていたことか。

九月上旬に日本に帰ってきてから、二カ月が経とうとしているのに、私は一度も映画館を訪れていない。忙しかったこともある。しかしそれだけではない。何かが私の意欲をそいでしまふのだ。人は映画館で見る映画とビデオで見る映画の違いを画面の大きさとか音

響効果の素晴らしさとかでとらえることが多い。しかし、そんなことは私にとって二次的な問題でしかない。断っておくが、パリのロードショー館は概して、画面は小さいし、音響効果も東京にくらべれば劣悪である。一緒に映画を見、その感動を、たとえ部分的であっても共有できることこそ、映画館で見る映画の醍醐味ではなからうか。

今回、ニキータ・ミハルコフの「黒い瞳」Gli Occhi neri をポンピドゥー・センターの近くの小さな映画館でみることができた。いつものミハルコフの作品と比べて多少感傷的だと思いつつも、その快い感傷性に身をまかせつつ、映画館を出ようとしたとき、目をうるませている中年の紳士と目が合い、私の目も同じようなものであることがわかっていて、照れ臭くて笑ってしまったのだが、相手も同じだったのだろう、私に泣き笑いを返してくれたのだった。このようなことは東京ではまず考えられないが、ここパリではとくにめずらしいことではない。

ごく厳密に考えるなら、芸術作品を鑑賞するのに、共感する相手を求める必要はないであろう。作品の享受はあくまで個人的なものであり、そこから得られる感動は自己完結的なものであるはずである。しかしこれはあまりにも正論でありすぎはしまいか。少なくとも、私は映画の感動はだれかと分かち合いたい気がする。終わったあとで、作品評を交わしたいというのは断じてない。上映中に、他の観客と共に涙や笑いをわかちあいたいのである。

いや、このことは映画についてのみ言えることではないだろう。我々はある芸術作品（それが映画であれ音楽であれ）に接し、そ

れなりの感動を得る。しかし、多くの場合、我々は不安である。なぜなら、感動というものはおそろしく不安定なものであり、例えば、それを他人に伝えようとしても、ことばでは十分表現することはきわめて困難なものであるから。こうして我々は、いはば自分の感動に対する確証を得ようとして、批評家の書いたものを読み始めるのである。ところが、批評家でも感動を文章によつて的確に分析することができる人間は極めて少ない。大抵は、とくに映画批評家の場合が最も顕著なのであるが、仲間うちでしか通用しないような貧困なことばで、自分の感想をこちらに押し付けてくるだけである。

マリア・カラスに関する本が何冊あるか数えたことはないが、二十冊を超えることだけは確実である。しかし、実にそのすべてが、彼女の芸術の分析ではなく、単なる伝記なのだ。それも、多少のちがいはあっても、あきもせず、オナシスとか恋愛とか、メネギーニ氏との離婚とかいった、かなり抵劣なスキャンダラスな話題を提供してくれるにすぎない。彼女の歌がなぜあんなにすばらしいか、このもっとも重要な問題に取り組んだものは一冊もない。それほど感動をそのままことばで分析するのは至難のわざである。

こういった状況のなかでは、たとえそれが部分的なものにすぎなくとも、他の観客と笑いや涙をわかちあえる場がたくさんあるパリは貴重である。私は、西ヨーロッパのほぼすべての大都市の映画館を知っているが、パリの映画館はまさしくこの点でユニークな存在だと思う。この伝統もまたやがては失われていくのかも知れないが、少なくともあと数十年は保たれることだろう。

（文学部教授）